

佐吉の夢

これは1954年、第五福竜丸事件のドキュメントをもとにした物語です

「そして私は、」

作、音楽、朗読：新(あら) 器量

歌：わか

第1章「荒祭り」

「ヤレキター！」の声に祭りの神輿が大きく煽（あお）られる。照りつける太陽を潮風が横凧にし、担ぎ手の体から汗が散る。海で鍛えられた男たちの筋肉が、太陽の光を浴びて赤銅色（しゃくどういろ）に輝いている。8月の半ば、焼津荒祭りの神輿の担ぎ手である佐吉と愛吉の二人も、身を清めるための白装束をまとい屈強の男達と共にいた。神輿を取り囲む群衆の中から佐吉の妻みすずは今年もまた嬉しそうに見つめている。

「アンエーットン アンエーットン！」のかけ声と共に、神輿は大きくうねりを見せる。

-音楽 22-

～荒祭り～

- 1、男神輿（おとこみこし）が うねりを見せりや 浜の若衆に 汗の華
今日は吉日 東海荒祭り 真夏の陽射しに 潮風吹けば 男人情ひとすじに
- 2、女神輿（おんなみこし）に心をかさね 高草山に 駿河の海に
神よあわせと 御神子（いちこ）がいのる
この日良き日に すべての人の世に 女純情ひとすじに

佐吉：「愛吉（あいきつ）さ～ン、正月開けのマグロ漁はまた一緒だなあーえ。愛吉さんが一緒にいてくれりやあーな、今度（こんだ）も大漁間違いねえだ。ちいっせえ時っから海のこたあ何でも教わってきたし、愛吉（あいきつ）さんと一緒なら、俺あ（おらあ）安心して船に乗ってられらーえ。こんだもよろしくたのまあーえなあー」。

愛吉：「おう！ほうだなあ。佐吉、お前（おめえ）もはあ一人前（めえ）の漁師だでなあ、頑張らざあー。楽しみだあなあーえ」。

佐吉：「愛吉さ～ン、日本中みんなが腹（はらあ）空（す）けて、待ってるだでえ、また大漁の魚もってきて、み

んなに栄養つけてもらわにゃ～ンなあ」。

第2章「ビキニ環礁沖で」

佐吉は遠くの海を見つめ、嬉しそうに愛吉に言ったあの夏の日から半年後（のち）の3月、22人の海の男達と共にマグロを追い赤道直下マーシャル諸島にいたその時、佐吉は太陽が昇るときよりも遥かに眩（まぶ）しいオレンジ色の光が突然湧き上がるのをみた。

乗組員：「オイ、ナンダアリヤ～！」

と驚くばかりで一体何が起こったのかわからない。その光に続き、地響きのような音が鳴り響き、爆音と衝撃派が襲い、さらに船を木っ端微塵にしようと、逆巻く波が押し寄せてきた。やがて破壊された珊瑚の白い粉が風に乗って佐吉達の頭上に降りそそいだ。振り続ける灰は目にも鼻にも潜り込み、口の中に入った灰はすっぱい味がした。しばらくすると乗組員の皆は頭痛、吐き気めまいに襲われ、事の大事を察知した船は急ぎ焼津の港へと引き返すことにした。

マーシャル諸島を離れて数日後、愛吉は佐吉に聞いた。

愛吉：「おーい佐吉、頭のモン、抜けねえかあ？」

佐吉：「いやン？抜けねえよっ、愛吉さん」と言いながら佐吉は自分の襟首付近の毛を引っ張ってみると、ごそっと髪が抜けてきた。

佐吉：「ウフ～ア！なんだあこりゃー、これじゃーおめー焼津に帰（けえ）る前（めえ）に頭のモンなくなっちゃうじゃねえか。漁師が漁にでて、行きは漁師で帰りは坊主じゃあ笑い話にもなんねえなあ」。

この時はまだ、乗組員の誰もがこの事態の深刻さに気付いてはいなかった。

第3章「乗組員たち」

こうして2週間をかけ、ようやく母港焼津に戻った乗

組員は、体調不良のため、長期の入院生活を余儀なくされ立って歩くことも出来ず、寝たきりになり食事もとれない状態が続いていた。この時乗組員の平均年齢は25才。

仲間の一人が言う。

乗組員A:「頭はずうっと痛えし口もろくすっぽ動かねえ、体も言うこたあきかねえし、ただ死人のようにじっとしているだけだあ。はあー俺（おらあ）二度と海にやー出られんらな。元の体に戻れんじゃあー、どうにもなんねえ」

さらに他の乗組員が、

乗組員B:「俺（おらん）、今もわかんねえ病気と戦ってるけえが、体なんかどうなったってええで、また海に出てえなあ。これからだってもさ、世の中の為にちいたあなりてえって思ってるんだしさあ。」

佐吉も言う

佐吉:「ほうだなあ、今は病気との戦いの人生の暗え谷間のどん底だあ、ただただ苦しいだけの埒も明ねえ毎日（めえんち）の連続でえ。だけんな、そういう毎日（めえんち）の中でも家族や焼津の子供たちからの手紙は、俺を明りい気分にならせてくれて、砂漠のオアシスのように慰められるきがしてな、その手紙を毎日腹の上に大事に乗して寝てるでえ。そうすりゃ嫌（やだ）事も忘れていられるような気がするでなあ」。

そんな日が続いてる中、愛吉は言った。

愛吉:「佐吉、ギターを弾いてくりようやー。祭りん時も、船ん中でもよくギター弾いてくれて、みんなで歌ったっきじゃん、得意の「返り船」を、ここでまたみんなで歌えてえなあ。そうすりゃちったあ元気も出て、明りい気分になれねえなあ」。

佐吉:「おうほうだなあー！愛吉さんやってみざあ、みん

なで一緒にうたあざー」と、佐吉はベッドの傍（かたわら）に大事に置いて有ったギターを取り出し弾き始めると、みんなは遠くの海をふるさとの祭りを思い出すように、楽しそうに歌った。その声はか細くかすれ、誰の声もかっつての海の男の力強さはすでに無かったが、それでも皆は何度も何度も繰り返して一緒に歌った。そうしていると、ひたすらに海を愛する屈託のない今までの海の男に戻れそうな気がした。つかの間の幸せの時だった。

第4章「神様の涙」

佐吉は思った。

佐吉：「あちこちでいろんな事ん起こってるけえん、地球の皆いんなが何時も仲良く生きていく事んできねえもんかなあ。雨は神様の涙、風は神様のため息だっつてゆうだけえ、神様でん思い通りにならねえ事や、悲しい事ん沢山（たあくさん）あるんだけんなあ。人は心と心が集まって生きてるんだだけえ。人の心が変わればちったあ世の中もよくなるだし、「人は心で生きるのだけえん」と、神様は雨を降らせ風を吹かせてるんだなあ」。

-音楽 29-

～神様の涙～

- 1、雨は 神様の涙 ポツポツ ポツポツ ポタポタ ポタポタ こぼれおちる
はやく やめばいいのにね なかなか泣き止まないんだね
神様にも涙がとまらないことが あるんだね
悲しいのは 君だけじゃない 寂しいのは 君だけじゃない
神様でさえ 涙を流すのだから 話してごらん 君の思いを
- 2、風は 神様の涙 ヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュ 吹き抜ける
はやく おさまればいいのにね 思いどおりにならないんだね
神様にも思い悩むことが あるんだね
悲しいのは 君だけじゃない 一人ぼっちは 君だけじゃない
話してごらん 君の心のなかを きつときつと きつとわかり合えるから
悲しいのは 君だけじゃない 一人ぼっちは 君だけじゃない
話してごらん 君の心のなかを きつときつと きつとわかり合えるから（くり返し）

第5章 「平和の願いゴジラの夢」

その後乗組員の治療は一年以上も続いたが、遠く太平洋、赤道直下までマグロを追った男達の体は完全に回復

する事はなく、ふるさと焼津に帰った佐吉は何度目かの祭りの音を遠くに聞きながら妻のみすずとこんな話をしていた。

みすずな、「最近ゴジラっていう映画ができただけえんな、これがビキニ環礁の水爆実験で放射能を浴びた恐竜がどでっかくなっちまって、マーシャル諸島から海を歩いて渡って日本の港に上陸するって話だえ。だけんなそんな原子怪獣がいそんなな放射能なんてねえって事にしぜえて訳で、自衛隊や政府が何とかしてゴジラを葬ろうとしてな、大砲はバンバン撃つは、機関銃のたまは雨あられのように降るはで、ますますゴジラは怒って原子の火を吹いて暴れまわるってえ訳だえ。ゴジラも戦争の武器の犠牲者なんだけえなあ。俺（おらん）からすると怪獣の名前（なめえ）は「ゴジラ」じゃなくて、「ヤズラ」のほうがええだけえんなあ」。せえでな、そのヤズラのだでけえモニュメントを作って、高草山のとっぺんに飾って平和のシンボルにするだえ。ヤズラのモニュメントは向かいの伊豆半島からも良おく見え（めえ）るし、富士山からも見え（めえ）て、ええ一目印になるぞつ。世界中の人に平和のシンボル「ヤズラ」のモニュメント作ろうって知らせて、「ヤズラ基金」を作るだ。それを見てりやあー、これっから先も今度（こんだ）の事件の事んわすれねえらし、戦争の為の核兵器なんていらねえだっっていつも思い出してくれるら。みすず何時か本当にそんなのを作りてえよなあ」。

第6章「佐吉の死」

そしてこの頃、ようやく人々は考えはじめた。海は、日本の海もアメリカの海も、ビキニの海も全部つながっている事を。空気は世界のどこも一つに繋がっているし、泳ぐ魚に国境はない事を、世界のどこで悲惨な

出来事が起こっても、やがてみんなが巻き込まれることを。佐吉は薄れる意識の中で、平和のシンボル「ヤズラ」のモニュメントを作る夢を、何度も何度もみすずに語り続けていた。

佐吉：「おらん（俺）もう生きられねえかもしんねえけえがな、愛吉（あいきつ）さん言ったみてえに、「人は石器から銅へ、銅から鉄へと平和利用してきたけえん、使い方によっちゃあ人を殺す武器にもなるだけえん、文明が進んで、すでに有る物を無えってえ事んしぜえってえ分けにやあ行かねえだし、そんなな物ともどう向き合って行くのか考えて行かなきゃなんねえわなあ。そんな事（ことん）忘れねえようにする為にも、どでけえヤズラのモニュメント作って高草山のテッペンから、世界が平和になるように見張ってるようにしてえなあ。そうすりゃあ今度（こんだ）の事件の事ん誰あれも忘れねえらし、人の心が集まって平和は創り出されるだって事（ことん）わかってくれるら。みすずな、俺（おらん）死んでも、この人の世を恨まずに「人はここで生きるんだけえ」と皆んながわすれねえように伝え続けてくりよーなあ」

第7章「そして私は、」

みすずは佐吉の残した言葉を胸に、心に誓った。

「あなたの残した平和への思いを、私はこれからも伝えていきます。世界中で起きた様々な事件や犠牲のことを聞かたびに、「人の心と心が集まって平和は作りだされるんだ」と、「人の心が変われば世の中は変わるのだから」「人は心で生きるのだから」とこれからも沢山の人たちに伝えていきます」。そして、思い出します貴方の事を。突然天に召された貴方の事を・・・。

音楽

～そして私は、～

1. あなた愛した 命がけ 何があっても 一緒ねと
私とっても幸せに 優しいあなたと 夢を見た
突然あなたは 天に召された
何が引き裂く 二人の心 何が邪魔する 二人の愛を
あなたのいない これからも 私に生きると いうならば
この人の世を 恨まずに 生きてみせます これからも
あなたの優しさ 胸に抱いて
命あるかぎり 心の中に あなたは 生きてるから

もう昔の事だというけれど。それは今も続いている。
白い珊瑚の砂におおわれ碧に輝く海に囲まれた南の島は、
その日もいつもと同じように穏やかな海が夜明けを迎え
ようとしていた。それでもドドーンと、とてつもない音
とともにそれはやってきた。目を射るほどに明るく美しい
光は、神様の贈り物なのかと人々は思ったが、やがて
それは違うことを知った。

それまでも戦いの中で多くの犠牲を生んできたが、地球を滅ぼすほどのその武器は僕らの心の中を大きき変えた。新しい時代がやってきて、僕らは平和を前よりもっと強く望むようになったけど、人を殺す為の武器は増え続け、戦争は今も終わってはいない。

2. あなた面影 胸に秘め 似た人を見て ときめいた
あなたに逢えて良かったと 優しいあなたの 夢を見た
二度と戻らぬ あなたの笑顔
心隠して なんになる 思い殺して なんのため
あなたのいない これからも 私に生きると いうならば
この人の世を 恨まずに 生きてみせます これからも
あなたの優しさ 胸に抱いて
命あるかぎり 心の中に あなたは 生きてるから

～終わり～

：この物語を作成に当たり、これらの著書を参考に引用させていただいています。

引用文献：ドキュメントの引用

・豊崎博光・安田和也 「母と子で見るA34水爆ブラボー 3月1日ビキニ環礁・第5福竜丸」2004年2月10日 草の根出版

：ゴジラの話-やいづ平和学入門-ビキニ事件と第五福竜丸 加藤一夫著 論創社 2012年11月10日

：焼津市歴史民族資料館刊行物 「第五福竜丸～2014年、平和への願い」

：地球に降る放射の話-ベン・シャーン「ここが家だ～ベン・シャーン～の第五福竜丸」 集英社

：原子力関連の言葉のアドヴァイス：藤田邦雄、：焼津の言葉：石野豊、清水達蔵

：歌：わこ ギター演奏：新（あら）器量、カえり船：河田るみ子 音楽：新（あら）器量

：この物語は第五福竜丸事件のドキュメントを元にし、自らも福竜丸の乗組員であった佐吉（架空の人物）が平和への思いを妻のみならず語る。そしてみすずは、佐吉のその思いを人々に語り続けようと心に誓う平和への願いの物語です。

：この物語を作成するにあたり、多くの方々にご協力頂きました事に感謝致します。また、この物語を多くの方々に聴いて頂く機会を持てる事を願っております。